



## 水辺の可憐なピンク「ミゾソバ（溝蕎麦）」

2024年10月7日

小川や沼沢、水田の用水路などの水辺の“溝（みぞ）”に群生しており、花や葉がソバ（蕎麦）に似ていることから「ミゾソバ」と命名。別名の「ウシノヒタイ（牛の額）」は葉の形が牛の顔に似ていることからそう呼ばれることもあります。花に鮮やかさはあり



ませんが、小さくやわらかなピンク色をしており、近寄って見ると、枝先に米粒ほどの小さな花が10数個集まって咲いています。金平

糖のようで、なかなか可愛げのある美しい花です。一方、茎や葉には小さな小さなトゲ（棘）があり、触れるとザラッと、やすりに触れたような引っ掛かりがあります。似たような植物に「ママコノシリヌグイ（継子の尻拭い）」があり、花はミゾソバと本当そっくりです。茎や葉には同じようにトゲがありますが、こちらの方がトゲが鋭く、うっかり触れると痛いぐらいです。葉の形が牛の顔形でなく三角形なのが同定（分類）のポイントです。ママコノシリヌグイは「トゲソバ」という別名でも呼ばれています。



## 見た目とは裏腹な「コシオガマ（小塩竈）」

2024年10月10日

阿南高校の天竜川対岸の泰阜我科に向かう道路脇で、ひっそりと咲いている小さくピンク色の可愛らしい花を見つけました。シオガマギクに似ていることからと名付けられた「コシオガマ（小塩竈）」です。草丈は20cm程度でしたが、50cmを超えるものもあるそうです。このコシオガマ、他の普通の植物と同じように葉を持ち、光合成をして栄養を作ることでもできるのですが、可愛らしい姿とは裏腹に、



自己の根が弱く他の植物の根から養分や水分をもらっている植物で、半寄生植物だそうです。（おまけ シオガマギクの名の

由来）ちなみにシオガマとは海水から熱して塩を取るための塩竈のことです。“浜で美しいは塩竈”（古い歌曲にあるそうです）から転じて（洒落て）、葉まで美しい植物だから「シオガマギク」と名がついたそうです。キク（菊）とついていたのは、葉が菊に似ているそうです。（実際はあまり似ているとは思いませんが、、、）何ともややこしいネーミングですね。



## 秋の風情漂う「オトコエシ（男郎花）」

2024年10月12日

この前（10月10日）のコシオガマと同じく泰阜村我科に向かう道路脇で見つけました。男郎花と書いて「オトコエシ」と呼ぶ、日本の秋を代表する花の一つです。



このオトコエシ、秋の七草の一つで黄色の花を咲かせ、お盆のお供え（お盆花）などにも利用されている「オミナエシ（女郎花）」と同じ仲間（科・属）です。オミナエシに比べ葉や茎に毛が多く、大きく男性的ことからオトコエシ（男郎花）と名付けられたと言われています。細かな小さな花を咲かせる白い花は他にも見られますが、こちら花が終わった後のタネ（実）が、写真のようにとっても特徴的です。うちわのような羽根の中に丸い花のタネが見えます。このうちわで少しでも遠くに種を飛ばそうとする工夫の一つですね。



## 秋の風物詩「アキノキリンソウ（秋の麒麟草）」

2024年10月14日

この時期（10月上旬）、路側や河川敷、空き地などの至る所で一面黄色の花が咲いています。背が高く泡のように細かな小さな花が咲い





ていることから「セイタカアワダチソウ」と呼ばれる、北米原産の帰化植物です。こちらはやたら増え、刈っても刈っても伸びる厄介な植物です。



元々、日本にはアワダチソウと呼ばれる、秋を代表する見た目も上品さを感じる植物があります。今回紹介する植物、「アキノキリンソウ (秋の麒麟草)」(キク科)です。阿南町大下条の町道(?)の道路脇でひっそり咲いているのを見つけました。前段のセイタカアワダチソウはこの花から命名されています。(アワダチソウはアキノキリンソウの別名) じゃあ、「秋の麒麟草」の命名はというと、葉が(厚めで乾燥に強い)多肉質で、草丈は低めの「キリンソウ (麒麟草)」(ベンケイソウ科)の花に似ていることから「秋の麒麟草」と名がついたそうです。似ているのは黄色の細かな小さな花を咲かせるくらいで、花期(花の咲く時期)や生息域、葉・茎も全く似ておらず、当然分類上の科も異なります。

植物(花)の名は、その背景や物語(ストーリー)が様々あって、奥深く興味深いものです。

アキノキリンソウはかつての里山の風景の一部で、素朴で親しまれてきました。それが近年では、身近で見つけるのがやっとになってきています。(開発が進んでいない山に入れば、林道などではまだ残っています。) いつまでも秋の風物詩として、愛していきたいものですね。(セイダカアワダチソウに負けるな!)

## 凛とした姿の「リンドウ(竜胆)」



2024年10月19日

目を引く鮮やかな青紫色で、凛とした姿の佇まいの花を見つけました。日本の秋を代表する花の一つ、そして、長野県の花でもある「リンドウ(竜胆)」です。

長野県の花として昭和41年に制定されたそうで、今は自生していたものを品種改良し切り花として栽培もされており、我々長野県民にとっては馴染み深い花(植物)です。

このリンドウ、漢字で書くと「竜胆」、素直に読めば“リュウタン”ですね。“リュウタン”は生薬の一種で、このリンドウの根が主原料だそうです。ですので、元々は竜胆(リュウタン)が訛ってリンドウ(竜胆)になったと言われて



ます。ちなみに生薬の“リュウタン”はとても苦く、漢方の胃腸薬などに使われてきたそうです。この

リンドウ、日を受けると開き、夜は閉じます。見つけた今日(10月19日)は小雨が降る空模様でしたため、開いている花と閉じている花が混在しておりました。また、リンドウの花ですが拡大してみてください。ポツポツと斑点がみられますね。なんか病気ののかなと思いきや、調べてみると、この斑点の部分には葉緑体をあり、すなわち、光合成をしているそうです。一般に植物の花では光合成をしません。高校生物の授業では、表皮細胞には葉緑体を持たないと学びますが、リンドウの花の表皮細胞には葉緑体があり、とても珍しいことなんです。



## 白いブラシのような「サラシナショウマ(晒菜升麻)」

2024年10月21日



阿南町大下条の町道沿いの暗くて湿気のある路肩で、とてもインパクトのある白いブラシのような花を見つけ

ました。「サラシナショウマ(晒菜升麻)」です。

小さな花が密集しており、この写真の花も20cmは超え、大きいものだと30cmぐらいになるそうで、かなり大型で存在感のある花です。パッと見、理科室にある(白い)試験管ブラシみたいです。

この「サラシナショウマ(晒菜升麻)」、春はこの若芽を茹でて山菜として食べることができるそうです。しかし、苦味がありその苦味を消すため水にさらしたことから「晒し菜」。そして、この植物の根が解熱やむくみを抑える生薬「しょうま





（升麻）」として利用されてきたことから「サラシナ  
ショウマ（晒菜升麻）」と名がついたそうです。美  
しい花（を鑑賞する）だけでなく、葉は山菜として、  
根は漢方薬としても大活躍の植物なんですね。